

令和の時代と良識の府

国家基本政策委員会 専門員

あきや くんじ
秋谷 薫司

令和になって最初の常会の開会を迎え、グローバル化や技術革新の急速な進歩を背景に様々な課題に向き合い、新たな時代のグランドデザインを描く契機でもある。新たな時代の幕開けを期待する矢先に、全世界に広がる新型コロナウイルス感染症の猛威に経済のみならず政治にも大きな影響が及ぶこととなった。自粛に伴う需要の消滅から事業継続への不安、雇用不安、生活資金の枯渇等様々な国民生活への影響に対して、感染症対策と並行して迅速な生活支援と景気回復の対策を講じる必要が生じ、立法府の役割は極めて重要な局面となった。緊急時における迅速性への要請と国家の基盤である民主主義をどう均衡させるか、衆参両院の個々の役割も問われる。今年は議会開設 130 年の節目であり、改めて我が国の二院制の在り方を考える機会でもあり、参議院としてはその存在意義と役割を再認識したい。令和に入っただけの話から参議院に注目したトピックスを紹介する。

まず、独立財政機関の設立構想がいくつか話題になった。そもそも財政健全化に向け、政府から独立して長期推計を行う等の取組を行う中立的な機関の創設の必要性が指摘されるものであるが、当該機関の参議院への設置について、経済同友会提言は「解散がなく、6年の任期が保証され、より長期的な視野で検証可能であるなど、良識の府としての役割を求められる」ことから、参議院に期待を寄せているところである。

そして、政策決定と科学的リテラシーについて調査、提言を行っている公益社団法人日本工学アカデミーは、科学技術政策がより適切かつ効果的な価値を有するため、アカデミアと立法府の協力関係を構築すべきであるとの報告を行っている。その活動の一環として立法府の政策過程の理解を深める目的で「アカデミアのリーダー育成プログラムに中長期的視点を持つために、良識の府参議院の調査会の運営アプローチ」を取り入れた。

いずれも長期的視野からの参議院の役割に注目しているものと言える。

また、公文書の管理に関して、福田康夫元首相の「予算執行に関わる文書（は）・・・参議院決算委員会が終わるまでは保存し、十分な国会議論に資するようにすべきだ」（『読売新聞』2020. 3. 17）との発言に見られるとおり、決算重視の参議院が一般的に浸透してきたとも言えるであろう。

これらは、昭和の時代に長期的視点からの政策論議を期待する調査会の設置と、平成の時代に参議院の独自性の観点から決算重視を制度化したことが認知されたものであろう。令和の時代の参議院はさらにどのような役割を担うであろうか。新たな行政監視サイクルが始まる行政監視機能の強化が参議院の特徴として認知されるか注目したい。そして前二例でも用いられた「良識の府」は、参議院の代名詞ともなっている。会議録上でも昭和 27 年を初出として、1,232 回（200 回国会まで）も使われ、参議院の理想像を表すものとして定着しており、事例をみても審議が紛糾した折に使われるケースが多いものの、同時に理性や道徳的姿勢を期待していることも見いだせる。コロナ後の社会を見据え、良識の府に相応しい役割が果たせるよう、調査を心がけていきたいものである。